

### ● 浦井 聰 特定助教

Satoshi URAI (*Program-Specific Assistant Professor*)

研究課題：〈もうひとつの京都学派哲学史〉の構築とその現代的意義の解明

(The Other Face of the Kyoto School: Rethinking its History and Contemporary Significance)

専門分野：日本哲学、宗教哲学 (Japanese Philosophy, Philosophy of Religion)

受入先部局：文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名：北海道大学 文学研究院

(Graduate School of Humanities and Human Science, Hokkaido University)



私の専門は京都学派の哲学です。京都学派（哲学）とは、1910年代から徐々に形成され、1930年頃から40年代前半にかけて興隆した京都帝国大学を中心とする哲学者のネットワークです。この学派は西田幾多郎と田辺元がその基礎を築いたとされています。京都学派研究と言えば西田研究が圧倒的多数なのですが、私はこれまで田辺哲学を中心に研究してきました。特に、田辺哲学の根幹である社会存在論を切り口として京都学派研究を進めてきた点に私の研究の特色があります。

京都学派は主に西田が切り拓いた〈無の哲学〉の系譜として知られています。これは確かにこの学派の最大の特徴をなすものですが、それだけではこの学派全体は説明できません。従来の研究の余白を埋めるために私が着目するのは、田辺が自身の社会存在論を1934年に世に問うた後、この学派の中心的な主題となった〈社会の哲学〉の系譜です。田辺の弟子だけでなく西田までもが田辺の社会存在論の影響を受けて自身の社会論を構築しました。本研究はこの系譜を掘り起こし、その現代の哲学研究への貢献を探るもので

My area of expertise is the philosophy of the Kyoto School. The Kyoto School of Philosophy refers to a network of philosophers centered around Kyoto Imperial University, which gradually took shape in the 1910s and rose to prominence from the 1930s to the early 1940s. This school is considered to have been founded by Nishida Kitarō and Tanabe Hajime. While the majority of Kyoto School research focuses on Nishida, my work has primarily centered on Tanabe's philosophy. A distinctive feature of my research is that I have approached the Kyoto School through the lens of Tanabe's social ontology, which lies at the core of his thought. The Kyoto School of Philosophy is primarily known as a lineage of the "philosophy of nothingness" pioneered by Nishida. While this is indeed a defining characteristic of the school, it does not fully account for its entire scope. To address this gap in existing research, I focus on the lineage of the "philosophy of society," which gradually became a central theme of the school after Tanabe established his social ontology in 1934. Not only Tanabe's disciples but even Nishida himself were influenced by Tanabe's social ontology in developing their own theories of society. This research seeks to unearth this lineage and explore its contributions to contemporary philosophical discourse on social ontology.

### 哲学の京都学派

京都大学吉田キャンパスからほど近い銀閣寺のそばに「哲学の道」と呼ばれる景勝地がある。この道に〈哲学〉が冠されたのは、京都帝国大学の哲学者たちが思索を進めるためによく散歩をしたからだと言われている。この哲学者のグループは1932年に「京都学派」と名づけられた。この学派に属すると見なされる思想家は主に、西田幾多郎（1870-1945）、朝永三十郎（1871-1951）、波多野精一（1877-1950）、田辺元（1885-1962）、久松

真一（1889-1980）、務台理作（1890-1974）、山内得立（1890-1982）、木村素衛（1895-1946）、三木清（1897-1945）、高坂正顕（1900-1969）、西谷啓治（1900-1990）、戸坂潤（1900-1945）、下村寅太郎（1902-1995）、高山岩男（1905-1993）などである。彼らを単なる同僚ないし師弟関係に留めない主な要因は、その多くがこの学派の祖と見なされる西田幾多郎の哲学——「西田哲学」として今日すでに国際的にも注目を集めている——に影響を受けて思索を展開した点にある。



図1：哲学の道（撮影：浦井聰）

## 西田哲学＝禅の哲学？

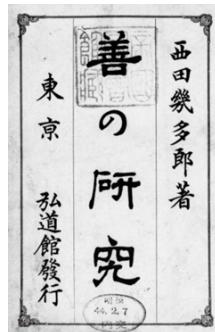
西田は最初の公刊書籍『善の研究』（1911）によって一躍有名になる。同書はしばしば〈明治以降に書かれた最初で唯一の哲学書〉という評価と共に語られる。一般にこの評は、評者の意図からは離れて〈『善の研究』は西洋哲学と禅を融合させた日本独自の哲学〉という意味で理解されることが多い。その原因是、同書が〈主客未分の状態にある純粹経験〉を中心概念としている点にある。通常、私たちは経験を語る時に常に自己（主）と対象（客）を分けて〈私は～を経験した〉のように主語と述語の関係を用いて説明するが、同書で西田が根幹としたのはそのような説明が可能になる手前の経験（純粹経験）である。これを私たちの日常の経験以上のものとして捉え、禅の宗教体験と結びつけることは容易である。何より西田自身、同書の執筆までに長きにわたって坐禅をしていただけなく、晩年には書簡の中で自身の哲学の背後に禅的なものがあることを認めている。実際、西田哲学の代名詞である「絶対無の場所」という概念が禅と全く無関係には出てこなかつたであろうことは確かである。そのため、西田哲学はその禅的な側面を強調して受容される傾向にある。

## 京都学派＝禅の哲学の学派？

この傾向は特に海外で顕著で、西田哲学だけでなくその禅的な側面を継承・発展させた西谷啓治や上田閑照（1926–2019）などが注目されている。〈禅的な哲学〉という看板は京都学派、ひいては日本哲学を特徴づけて他と差異化するのに便利であるだけでなく、実際に東洋思想に興味を持つ海外の研究者の関心を引くものだったからである。確かに京都学派は絶対無の概念を

中心とし、仏教も哲学の素材に含めているという点で、〈無の哲学〉はこの学派の特徴であり、これを東洋的な関心から理解することは間違いではない。

しかし、京都学派の思想家がすべて無（絶対無）を中心に哲学を展開したわけではなく、禅的な哲学を展開した者はもっと少ない。もし後者を京都学派の特徴とするならば、冒頭で挙げた名前のほとんどをこの学派の名簿から除外しなければならないだろう。逆から言えば、現在脚光を浴びている「京都学派」は実際の京都学派の豊かな思想の鉱脈のごく一部に過ぎないのである。

図2：『善の研究』  
(国立国会図書館所蔵)

## もうひとつの京都学派哲学史—— 〈社会の哲学〉の系譜

このような状況で本研究が新たに掘り起こそうとするのは、京都学派の〈社会の哲学〉の系譜である。西田が京都学派の〈無の哲学〉を定義したのと同じように、この学派の第二の人物である田辺元は〈社会の哲学〉を定義したと言える。田辺が1934年に世に問い合わせた社会存在論は、その後10年間の京都学派の中心課題である社会についての哲学の雛形となった。田辺の弟子たちだけでなく師であった西田ですら、田辺の造った雛形を活用して自身の社会論を構築したのである。しかし、これまで京都学派研究は西田研究が中心となり、田辺研究が十分に為されてこなかったことからこの系譜は注目されてこなかった。本研究はこの系譜を掘り起こすことで、西田哲学に偏った京都学派像をこの言葉が最初に使われた際の内容「西田＝田辺の哲学」へと立ち戻る一步を踏み出し、そこからさらに現在の欧米圏の哲学研究の主要なトピックのひとつである社会存在論（social ontology）への貢献を模索するものである。

## 参考文献

- 浦井聰『田辺元—社会的現実と救済の哲学—』（京都大学学術出版会、2024年）
- 藤田正勝『日本哲学史』（昭和堂、2018年）
- 藤田正勝『日本哲学入門』（講談社、2024年）